

## 強者となる道(1)

強者は勝ち、弱者はまける。これは自然の法則であります。強者になりたい。常に勝ちつづける強者になりたい。それは私どもの衷心の願いであります。

我らが真に生活して行くのに、いやな二つのものがある。それは、弱いこと、愚かなこと、の二つであります。強くとも愚かであるならば、真の強者ではない。いわゆる勇あつて智なきは匹夫の勇であります。元氣のある強そうな人でも、愚かであるならば、かれは弱者とおなじように罪惡の根源となります。げに弱者と愚者と、ともに罪惡そのものであります。

愚かな者は嫉妬(しつと)する。自ら精進努力することを忘れて、他人の優れているのに嫉妬の刃をむける。この嫉妬する相ほど卑しくさびしいものはない。そうしてこの刃ほど深刻な痛みをあたえるものはない。自他ともに傷つけられる。しかし注意しなくてはならぬことは、嫉妬の刃は、相手の光や徳をば寸毫(すんごう)も傷つけることはできないことである。愚者は嫉妬心におだてられても、識者の眼をあざむくことはできぬ。天日は雲におおわれても、雲が天日を消すことはできない。嫉妬は相手の真価を傷つけることができなかりでなく、これくらい、嫉妬ほど自分の徳を傷つけるものはない。嫉妬心は我執の心から生まれる。我執は、一切の徳性を粉碎する。嫉妬心の動くところに、真人格の光は消える。こいねがわくば、嫉妬されてもいい、嫉妬してはならない。されど我らは不断にこの愚かな心にとらわれてしまう。我らはこれを悲しむ。

愚かな者は高慢である。たとえ万巻の書をよみ、學歷学階が高くても、彼がもし高慢であるならば、彼は徹底した愚者である。自己自身を知らず、動く本箱となり、もの言う辞書となつた時、彼はその借物だけを鼻のさきにぶらさげて、愚かな高慢の相を暴露する。見よ愚者や、学べる賢者の高慢な世界が、どれだけ世間に暗をつくるか。知者は謙讓である。さながら愚者のごとく敬虔(けいけん)である。

弱き愚者は、迷う。そうして彼は苦惱の氏に自暴自棄する。自暴自棄する者は正しい人生を捨てた者である。自分自身の道を失つた者である。

我らはかくて真の強者になりたい。愚かさから救われ、弱さから出て大地の上に確かな足跡を印しつづ強者の歩みが続けたい。

我を捨てよ

家庭の中に自分を捨てきれ。職業の中に自分を捨てきれ。社会の中に自分を捨てきれ。捨てできるところに強者の道がある。

善にとらわれるな。悪にとらわれるな。名にとらわれるな。思想にとらわれるな。情実にとらわれるな。打算にとらわれるな。すべていつさいにとらわれるな。かれ。

いつさいの執繫(とらわれ)から開放されて、信念の中に身も心も捨てきれ。

ほめられるのが必ずしもいいのではない。そしられるのが必ずしも悪いのではない。そしられ、疑われ、悪く言われることにしぼられているのは、荒なわで足がく

くられているのだ。名誉や情実やよい評判にしばらくられているのは、金の鎖に足をくくられているのだ。

いつさいのとらわれから出た心とは、死をすらいとわぬ心である。

目的をたてる。それができない。

ごりつばな議論をきく前に、いつさいをなげ出していたかどうかを聞きたい。私のすべてを捧げきった世界をみよ。彼は堂々と進む。大道の中を権威者のごとく進む。

徳川家康が、会津の上杉景勝を討つために、野洲の小山まで進んだ時、急使が来て、大阪方では石田三成が大軍をおこして東にむかったと伝えた。前に上杉、後に石田を迎えねばならなくなった家康はすぐ、使者を仙台の伊達政宗のところを立て、

「この度、徳川家康に味方して、上杉景勝が会津(あいづ)城を出るを待つて、伊達の大軍をもつて会津城を攻め落としてくれるならば、天下平定ののち百万石の加封(かほう)をする。」

と要求し、後日の証に一封の御墨付を賜わり、百万石の加封の約束をした。かくて西にのぼつて関が原に石田三成と戦つて、世にいわゆる天下分け目の大戦、関ヶ原の合戦に勝ち、大阪冬の陣、夏の陣もすんで、徳川家康は天下をとつて將軍となった。間もなく家康は死んで二代將軍秀忠の代となった。伊達政宗は例の御墨付をもつて、たびたび約束の実行をせまつた。幕府の大老たちもこの実行することのできない御墨付問題には、ほとほと頭をなやましてきた。

その時この問題をみごと解決した英傑があつた。それは井伊直孝である。直孝は自ら進み出て、使者となり、政宗の居城に出かけて彼と面談した。直孝はまず、御墨付の一覧をこうした後、これを引き破り、丸めて火鉢のなかくべてしまった。政宗は烈火のごとく怒り、その乱暴を責めかかると彼は静まりかえつて言った。

「伊達家のおため(いだて)でい(い)やう。」

その一言、千斤(せんきん)よりも重い。彼は絢々(じゅんじゅん)と説いた。「家康公が百万石をあたえると言ったのは天下を治める方略である。貴公は大軍を率いて、景勝をおさえたがゆえに天下は治まつた。この功績は百万石を加封されたよりも子孫長久の基を開いている。お家は万代である。もし百万石がほしくばあたえぬこともないが、親藩ならぬ伊達家が、強いて百万石を領したならば、孫まで待たずとも伊達家は滅びるかも知れぬ。肥後の加藤忠広、広島福島正則が滅んだことは貴公も御存知であろう。直孝が御墨付を破つたは、徳川のためではなくて伊達家のためである。御承知ができねばこの直孝の首を打落としなされよ。」それが直孝の言葉であつた。さすがの政宗も直孝の態度には参つてしまつて百万石の請求をやめた、のみならず彼ら二人は終生親交を結んだそうである。私は家康の約束不履行をうんぬんするのではない。

「伊達家のおため(いだて)でい(い)やう。」その一語を発した彼には名誉もなければ富貴もない。

結果を案ずる因果観念をも超え、自分の首をさし出している。

至誠のひらめくところ、尊もなく悪もなく、ほめられるもなく、そしられるもない。

ああそこには何がいったい問題なのか。我を捨てた相の尊いかな。

英傑政宗は、百万石の加増の欲があり、自分の子孫が大事であり、自分の家が大  
事である。直孝を殺せばあとがこわい。彼は因果にくぐられ、善悪にとらわれ、欲  
にしばられている。いつさいのとらわれから出て天真の風に安座する直孝の前には  
勝たれない。

もし直孝の腹なくして、野心のために直孝をまねたならば、首と胴とは政宗の一  
刀のもとに別になつていたかも知れない。

強者になる道がある。

我を捨てよ。とらわれを脱せよ。死をもいとわぬほど我を捨てよ。

### 純一なる価値観

二兎を追う者は一兎を得ず。

一人で二つの道は行かない。

右に行こうか、左が見える。左に行こうか、右もほしい。彼は迷いはじめる。  
強者に二つの道はない。

アテネの街には貧しい老哲人ソクラテスが「徳を愛せよ、そして智識をのぞめ。」  
と叫びつづけて歩く。彼の前には何者も限中がない。ただ彼が信ずる神があるばか  
りだ。汝自身を知れ！神を信じよ。何ゆえに金銭と名誉の事のみを思い煩うのか、  
智識を求めないのか、其の神に服従しないのか！彼の舌端は火よりも熱い。

アテネの最高権威を握っている皮商人アニタスは、自分の権力の前には何者も頭  
を下げると信じていた。事実彼の前に頭を下げぬ者とはなかった。しかるに彼を  
正面からこきおろし、苦言を呈してはばからぬ者はソクラテス一人である。彼の子  
供の養育に対して「やくざものにすな」と忠告したのである。

アニタスの怒りを買ったソクラテスは、アテネの大公会堂に引き出されて、市民  
から選ばれた五百人からの裁判官の前に罪をさばかれることになった。

ああ。何たる愚かなる裁判ぞ！ こうした無意味な裁きが、現在の日本にはない  
か。

七十歳を超えた哲人ソクラテスは無意味なる裁判の席にひき出された。

「アテネ市は今日、ソクラテスの罪状を決定するために、この裁判を開いたのであ  
る。彼が有罪であるか、無罪であるか、彼を死刑に処するか、放免するか、諸氏の  
裁判を求める。」と裁判長が宣言する。まず被告の申したてが聞かれた。ソクラテス  
は立った。彼の人格は少しもとり乱れない。沈着の態度には少しの変化もない。

「……諸君の裁判が私をかりに無罪にしてくれたところで、有罪としたところで、  
私のゆく道に変更はありません。」

おお私のゆく道に変更はありません！

何たる強者の声ぞ、

その所へ全人格をあげての一本道が見える。世間の風模様くらいのことでは動かすことのできぬ真実の通がある。

この一本道に立つかぎり、富貴も淫(いん)するあたわず、威武も屈することはできない。

「私は依然として叫ぶであります。『アテネの人よ、私は真に諸君を尊敬します。また愛します。しかし私は諸君に服従するよりも神に服従します』と。諸君よ、私は将来、余命のある限り、力のある限り『偉大なるアテネの市民よ！ 諸君は何ゆえに、金銭名誉の事のみを心に心を用いて、智識と真理を求めることに努力しないか！ 正しい神を信じないか』と叫んでやまないであります。」

その所には妥協もなく哀願もない。憐(あわれ)みを請うために一言も使わない。いえ彼はこの死の幕の隣に立つてなお、力強く権力と不正とをのしつて正義を主張する。こうした場合に権力は必ず、彼をしいたげる。「ソクラテスを死刑に処す。」

「死刑の宣言は謹んで拝聴しました。」

彼の態度は変わらない。怒りもなければ恐れもない。

「皆様は一個のソクラテスを殺して何になります……」

私は老人です。長く生きる身ではありません。死刑にされて何のさしつかえがありません。

ただ私を死刑に処する皆様に一言聞いていただきます。

死とは何ぞや、あたえられた死とは何でしょう。ある者は死は無の世界だと言う。またある者はこの世からあの世への変化にすぎぬと言う。もし死が無意識の境地で、長い眠りだとすれば、死ぬことはまことにけつこうな事です。なぜならば永久なる一つの熟睡と同一だからである。これに反して、もし死がこの世からあの世にゆく変化であつて、そこには昔の死者が全部存在するものならば、死ほどおもしろいことはない。

そこには正しい裁判官がおり、その裁判をあの世で再び受けることができるならば、それこそ私がお願いして行きたい旅行である。もしそこにオーピアスやホーマーというような死んだ偉人がいて、快談することができるとすれば、私はどんな犠牲をはらつてもそこに行きたい。然り、もしこの説に偽りがなければ、私をして何回でも死なしめよ！ 何回でも私はそこがなつかしい。私はそこでなお智識を追うことができる。その裁判がつまりらぬことで死刑をあたえるわけではない。

裁判官諸君！ 私の死を尊んで下さい！ 善人にはいかなる場合でも、悪い結果が来るものではない。

最後にお願ひします。私の子孫がもし、徳を愛することが富を愛することよりも弱かつた場合には、なにとぞ彼らを罰して下さい。」

何たる公明正大ぞ！

一言一句、ことごとく名言ではないか、宝玉ではないか。

公判はとじられた。裁判官が皆ひき上げようとした時である、彼はかの有名な一句を叫んだ。

「今こそ別れる時が来た。

我らはおのおの定められた道をゆくのだ。

私は死の道に

諸君は生きる道に

しかしいづれがいいかを知っている者は誰ぞ！」

五百の市民肅然として足をとどむ。

はたしてソクラテスの道は死の道か。愚かなる権力者の道が生きる道か。いづれが正しい道かを知るものは誰ぞ！

沈黙の胸に声あり、この声をきく者、いくばくぞ。この声を聞く世界、我らはいづれを信とよぶ。

哲人ソクラテスは愚かなる権力の前に死刑になるのだ。

弟子のクリートが、牢から逃げよとすすめた。

「私に逃げよというのか、私は半世紀の間、法律に従順であれと説いてきた。今になつて一生の誓を捨てよというのか。私は長い間、市民としての特権と自由とを享受してきた。しかるに今死刑の宣言を受けたからとて、死を恐れて法律を破り、愛するアテネの街をあとにして逃げよというのか。私は私の百を破ることはできない。」

いつまでいつても二つの道はない。二つの道のない者には迷いはない。

年一回のにぎやかなお祭の日、市民が安価なる歡樂の空気に踊り狂う日に、不朽の大哲人は死んでゆく。

彼は常に変りはない。女をさけて男子の友人にとりまかれつつ正義を語ることに変わりはない。

彼は入浴して体を清めた。死の床は用意されてある。彼は毒薬の杯をとりあげた。そして気軽にのんだ。友人たちが泣いているのを平気で、なぐさめなだめて、立つて部屋の中を歩く。

「少し足がおかしくなった。」

毒杯をあたえた獄卒は、

「どうぞこちらへ寝て下さい。」

老体は死の床に横たわる。手足の色が変わる。股のあたりがつめたくなる。

「この毒が心臓まで来れば、それでおしまいだ。」

沈黙、墓場のような静けさ、それがまた破れた。

「クリートよ。私はいつか、アスクレピアスに鶏を一羽借りておつた。あれを忘れていた。返してくれないか。」

間もなく彼の平和な呼吸はたえた。

偉大なる死よ。

一切を捨て真理の殿堂にかけ登つた哲人の強さ。

我らはこの精神の一片をでも我らの一生に織り込みたい。



## 十周年大会来る

「念願は人格を決定す

継続は力なり。」

こう叫びつつ彼は、彼自身の道を歩んで忍従と精進とをつづけてきた。そうして十年たった。

おお十年間。

彼に涙なくしてこの一語がいえるだろうか。

小さい歩みであったかも知れぬ。つまらぬ努力であったかも知れぬ。

しかし彼は今十歳になった。

大正八年一月、広島県安佐郡飯室(いむろ)村小学校の粗末な宿直室で、「光明」の第一号が謄写版刷りで生まれた。それは雪の降る寒い日であった。

彼は一寒村に小さい芽を切ったのだ。

たった三四十人の若い人たちの手に「光明」が行き渡った時、たちまち一村の若人たちは馳(は)せ参じた。けれども彼の使命は決して今日のごとく大きなものを予想せられてはいなかった。山村の問題であり、青年仲間の小さい営みであったのだ。

青年時代特有の、愛と名誉と希望とを得んとするあこがれを、運命にしいたげられ蹂躪(じゅうりん)された彼は、寂しい人生の広野をさまようた。悶々(もんもん)の情に数年間を苦しんだ彼は、それでも一人何ものかを求め、何ものかを追うて若い苦悶の日を哲学した。

人生の無常、大地の矛盾、生きることのさびしさを痛感した彼の胸にも、更生の日が訪れた。苦悶と読書、不平と沈うつ、自暴と卑怯、暗黒と焦燥、そうした長い日がおわって、信の火はかすかに点ぜられた。それは彼が二十四歳の夏だった。二十五歳の早春、雪が毎日降りつづく寒い日、彼の胸の炎は、このささやかな「光明」第一号となって生まれた。意義ある人生を歩みはじめたのもこの時からであり、苦闘の人生の歩みがはじまったのもこの時からであった。しかり、彼は苦をさげなかつた。

貧しい彼は紙を買わねばならなかつた。謄写機も買った。そうして三周年がくるまで毎月謄写版刷りの「光明」が出された。三周年がすぎると、「光明」は活字印刷になった。彼のわずかな月々の俸給の三分の一が印刷費にとられた。毎月の俸給の内から、父に手伝い、弟の学資を出し、「光明」の印刷費の不足を出して、彼は毎月十円で衣食住をすまさねばならなかつた。

彼は小使さんに頼んだ。

「今日以後、どうか野菜でもおとうふでも何でもいいから、肉や魚や金のかかることをしてくださらぬように。」

「おきのごうへい……………」

と小使のおばさんが泣いたこともあった。

もう動けない。毎月の印刷費が支払われない。借金が二百円、三百円と積もる。幾多の苦難がつぎつぎにおしよせる。もうこの月きりでやめようと幾度行き詰まったか知れない。しかしそのたびごとに「継続は力なり。」の聲が彼を立たせた。そうして不思議にまた新しい道が開く。もう四年も毎月「光明」を出しても何の反響もない。私のすることは時代の要求には何の関係もないのだろうか。

彼が読書に没頭したのもこの数年間であった。午前二時、三時の起床も続けた。大正十一年の暮から十二年の春にかけて、ついに光明団の上にも大きな試練の日が来た。一村の問題であった彼は、もう一村のものではなかった。社会はようやく彼を問題にしはじめた。そうして青年男女が信仰求道の旅に出発した。彼は日曜ごとに広島市、その他に講演に出なければならなかった。この頃光明誌は全国各県に出ている。

かくして大正十二年四月一日二日三日の三日間、五周年大会は、濟世軍(さいせいぐん)主管、故真田増丸先生を講師として招へいして開かれた。真に拳村一致であった。村長はじめ村の有志は役員となり、全村五百、二日間のしたくに出てくれて、白熱の大会の幕は切つて落とされた。春だ！ そうして長い忍苦をおわった光明団にも春が来た。各地の支部はことごとく参加した。幾千の大衆が見るこの輝かしい空気の中に戻した。

しかしその大会が開かれてある最中から青い魔の手は動きはじめた。そうして冬から春になつて芽をふき出した彼をつみとろうとしはじめた。

四月、五月、六月、彼は大きな迫害、非難、悪罵、攻撃と、援助、讃嘆、激励、撰護(しょうご)のうず巻きの中に試練された。ああ、涙ぐましい人間性の誠を見たのもこの時であった。社会の底に巣くう毒牙の相を見たのもこの時であった。長い間苦しみをいた彼は、五年たつても決して幸福ではなかった。彼はついに教職を捨てるか、光明団を捨てるかの分水嶺に立たされた。彼の一生をこの村に朽ちんとした理想は蹂躪されたのだ。大正十二年七月彼はついに無一文、いいえ支払う見込みさえない借金とともに、聖典一さつ念珠一連それだけをもつて、念仏しつつ濁乱の渦中に投げ出された。何たる冒険ぞ！

その年の暮十二月父と母と弟妹三人を連れて広島市に出た。何のよるべもなく、助力者もない生活難の街に、さながら喪家の犬のように食うにも困る日が続く。

大正十二年、それは実にはなばなしい苦難の中に暮れて行つた。それから五年間、赤手空拳、奮闘また奮闘、東奔西走、東京より朝鮮までその手足をのぼし、各地に同胞が生まれ、支部が設けられ、ここに大きな光を前途に見つつ、本団の準備期たる十ヶ年間を経過した。

何事をするのにもまず、自分一人が立たねばならぬ。しかし一人では何もできるものではない。合掌して、十年の過去を追憶する時、まづ私の胸にうかぶものは十年間私を助け、私に共鳴し、私のために努力して下さった同胞たちに対する感謝である。



くつ下一足買う金のない日に、そつと修繕してしまつておいて下さつたあなたの親切。月々の印刷代に困つてゐる時、お化粧一びんをしまつしたり、余分の労働をして出して下さつた尊い浄財が、飯室時代の会計を支えた。

大正十二年七月広島市に出るや森田氏、前田氏等は、家を解放して臨時の本部に提供したり私の生活をささえて下さつた。

それから以後、私は常に各地の同胞たちの赤誠によつて支持されて来た。人情の花の咲く広野、その広野から広野に、私が倒れずに十年間育つて来たのは、全くあなたごの奉仕のたまものであつた。功績があるならばすべて多くの同胞たちの赤誠にかえさねばならぬ。「感謝します十年間！私のためにつくして下さつた同胞たちの赤誠に対して合掌のほかありません。つつしんでお礼申します。」と私の魂は涙にささやく。一粒の種が地にまかれて、ふた業をきると、虫がついたり、ふた葉でむしり取ろうと魔手がのびたり、ひでりも続けば、長雨にもあう。大暴風に枝がさけたり、葉がとんだり、苦しみぬいて太つてゆく。虫をとつてくれた人は今いずこ。水をやつて下さつた方、魔群と戦つて下さつた人、大暴風の垣になつて下さつた人々は今いずこ。小さかつた彼が十才になつたその裏にかくれた、育ての親としての同胞の尊い努力を大地に合掌して謝せずにはいられない。

光明団は、民衆のためにはたして敵であろうか。

彼は、はたして社会に害毒を流す悪魔であろうか。

彼は決して戦いの団体ではなかつた。

しかるに無理解な民衆と、嫉妬を感じるある徒の勢力とは、彼の上に忍ぶべからざる、悪罵と嘲笑と迫害とを加えた。そうした日に彼の生き方は、はつきりとしておつた。

悪罵に報いるに悪罵をもつてするな。

非難されても言いわけするな。

ただ忍べ！ 　ただ忍べ！

私どもは旧教団や既成宗教を誹謗(ひぼう)しない。もし講演の席上などで、それをする者がいるならば、それは団精神に根拠はない。他を攻撃して得意になるほどひまな時間はない。それよりも大衆の胸に訴えよ。真剣に信の叫びをあげてゆけ。それが光明団の真精神であつた。

こうした団の精神にたつて、四面楚歌の迫害の中におかれても、忍従の積極道を一步一步、闊歩(かっぽ)してくれ各地の同胞に深謝する。

私たちの真精神は、今や各地に認められてきた。しかしまだ光明団を毒蛇のごとくきらい、一步もこの地には入れないと怒号している地方もある。われらは、われらの真精神が全国的に知られぬほど努力が足りない。新しい歩みが始まると、必ず迫害攻撃は覚悟しなければならぬ。そこに凡夫のおち入りやすい我執と、真に生きる大道とがある。われらは反動でなく、復讐でなく、大信念の上になつて、人類平等の大慈悲を常行し、合掌してその使命のために突進せねばならぬ。

光明団の宗教運動が、今日に至ったのは、宗教を老人のもの弱者のものと考えていた青年男女、知識階級の人たちを対象としたからであった。

老人は老人で導かれねばならぬ。しかしその指導は足っている。われらは、青年の上に目をつける。宗教は決して老人のものではなくて人間のものである。社会のものである。真人格の創造。物の背後に動く法則をにらむ眼、苦の中にたつて動かぬ力、それを獲得して、未来永遠に生きてゆく大道を生活することが宗教であるかぎり、宗教は決して老人のものではなくて、人間のものである。

幸いに私どもの努力は無効ではなかった。各地の青年は立った。知識階級に迎えられる。われらの将来の活動方向に動きはない。

私は各地の団員に捧げる。われらの十周年は来た。緊張せる本部の空気に相応して、ここにいよいよ勇ましく求道に、いよいよ強く聖戦に進出されんことを。

無学者めが、と言われてもしかたがない。私には何らの肩書もないのだから。青二才がと言われてもしかたがない。たつた三十四才の青年である。

しかし、努力の二字、精神の一語は一日も私から離れない。無名の青年の心は、無名の青年の心に通じる、共に精進しよう。忍従しよう。死を覚悟の前に、何がいったい問題であろう。名を捨てよ、強くなれる。我を捨てよ、強くなれる。はからいをやめて努力せよ、死地にも活路が開かれる。

あなたが、あなたの地にいるということが、あなたの周囲を明るくすることである。

われらの十周年は来た。あなたのみ手によつて、努力によつて、光明団の真精神を発揮するために、新しい努力を切願する。

ああ、われらの十周年大会は来たる。